

井伊直虎ゆかりの地!! 館山寺と村櫛と井伊家

姫街道

発行:平成28年4月20日
姫街道未来塾 瓦版
号外 館山寺温泉観光協会
発行人 上嶋裕志

●井伊家のはじまりは庄内半島か?!

浜名湖の東、村櫛に志津城址がある。千年にもわたる時を経て井伊家との物語があらためて見直されている。

井伊家の祖、共保の出生のなぞに諸説ある。志津城の藤原共資の子として村櫛で生まれた。井伊谷で生まれた。井伊谷の井戸の中で生まれた。井伊谷で生まれ後に共資の養子になった。などである。共保は共資の実子が養子か。どこで生まれたか分かれる点であるが「引佐町物語」記述が妥当ではないかと言われている。

井の国千年物語では龍潭寺の近くの御手洗の井戸で生まれて間もない男の子が、元旦に捨てられていたとある。



志津古城記念碑

●捨て子は丈夫に育つ
当時、共資には世襲とすべき男子がなかった。これまで男子が生まれても、なぜか育たなかった。そのうちに幸運にも、また男子が生まれた。共資は「捨て子をして、それを拾いあげて育てると丈夫に育つ」という風潮を聞いていて、寛弘7年(1010)元日の早朝、日頃信仰している井伊谷の地藏寺(龍潭寺)に出かけ、近くにある井戸の傍らに置き捨て、僧が井戸へ身を清めに来るのを待った。やがて僧が来て子供を拾い上げて去った。物陰で無事に拾われたのを確かめて村櫛に帰った。しかし後日、自分の子であることの証しを残しておかねばと思い、再び井伊谷に出かけ、井戸の傍らに藤原家の紋章である橘の木を植えて帰った。



志津城址の近くにある法雲寺観音堂

国政に参与されて遠江の国司となった。何代目かは不明。当時国司が政治を行う場所は磐田郡見付にあったが、共資は見付には住まず、海に面した風光明媚な村櫛を生活の場所として志津城に住み、静かに余生を送り、長元8年(1035)75歳で亡くなり、背後の丘の上に葬られたという。

●庄内半島の村櫛にある志津城
正暦4年(993)に藤原鎌足より12代の孫、藤原共資(ともすけ)が勅を奉じて遠江国に下り、村櫛に志津城(館)を築いて住んだといわれている。藤原共資は、はじめ遠江国内の巡検を使命として来たのであるが、その後次第に重く用いられ、



藤原共資公記念碑

月日は流れ、子供は成長してやがて7歳になった。そこで共資は地藏寺に向いて住職に会い、事情を詳しく話して厚く礼を述べ、子供を連れて村櫛へ帰った。共資は子の名を共保と名づけた。共保は聡明な子として、立派に成長し、万寿1年(1034)一五歳で元服した。壮年となるに及んで技量人を越え、武勇も世の常でなく、恩威並び備わって郷人は、みな敬服した。父の官をついで備中守となり、遠江全般の政治を行った。けれども共保は、幼い頃育った井伊谷が忘れられず、井伊谷へ移って住みたいと願い、共資もその思いが強いのを知ってこれを許した。共保は城を築いて井伊谷に移った。

共保は、地名にちなんで、姓を井伊と改めた。これが井伊氏の祖で、以後、源平時代から戦国争乱の世を経て、徳川末期まで二四代八百余年も活躍を続けたのである。その中に途切れそうになった井伊家を守った「女城主井伊直虎」の物語がある。

●今、堀江城は浜名湖パルパル



御陣山にあった堀江陣屋のところ

庄内には志津城・佐田城・堀江城があったという。堀江城は浜名湖の重要な海上舟運の役目を担っていたと思われる。幕末まで残った堀江城の城主大沢氏の菩提寺は県指定の民俗芸能「呉松の大念仏」で有名な庄内町の宿蘆寺にある。



共保が捨てられた御手洗の井戸